激動の歴史を乗り越えてきた八代の「妙見」

新型コロナ禍の影響は八代の秋の風物詩・妙見祭にもおよび、昨年に続き神幸行列は令和３年も中止となった。しかし、11 月 23 日(火)に「お祭りでんでん館」で開催された代替イベントでは獅子や笠鉾、亀蛇の演舞が行われ、多くのお客様で賑わった（おかげさまで隣接する当館も賑わった^^）。やはり八代ではこの日は特別な一日。妙見祭が広く深く人々に浸透・定着していることを、私自身今までになく実感した一日だった。

その「今までにない」感慨深さは、新型コロナ禍でのイベントという特殊事情にもよるが、理由はそれだけではない。どうやら本展覧会の企画・調査研究を通じて、八代の「妙見」が時代の荒波を乗り越えてきた歴史を知ったことが多分に影響しているようだ。

今ではなかなか理解しがたいが、少なくとも八代妙見宮（現八代神社）には、歴史上、存亡の危機が２回あった。１回目は 16 世紀末、天正 16 年（1588）から八代の統治者となったキリシタン大名・小西行長の時代。享保 15 年（1730）に妙見宮神主が書いた『妙見宮実紀』（右上写真）には、行長時代に領内の神社仏閣は弾圧を受け、妙見宮の祀官・社僧も「神体を捧げ負いて」他所へ避難した書かれている。実際には行長の統治時代（1588-1600）すべてで弾圧したわけではなく、八代における本格的なキリスト教布教が確認できるのは慶長４年（1599）のみ。しかし、一瞬だったとしても妙見宮がこのとき衰退したのは確かだ。

２回目は明治新政府による明治３年（1870）の「神仏分離」政策。同年８月、八代妙見宮に対していきなり「妙見社の儀、神社と相究め」とする通達が下された（熊本県立図書館所蔵『熊本県公文類纂』32-5）。これにより、従来神仏同居してきた八代妙見宮は神社として存続することとなり、神宮寺以下仏教関係施設はすべて廃止。それまで崇め祀られてきた仏像・仏具や、さらに神宮寺住職らまでもが突如退出を余儀なくされたのだ。当事者たちにとってはまさに青天霹靂の出来事であり、その驚き・戸惑いは察するに余りある。

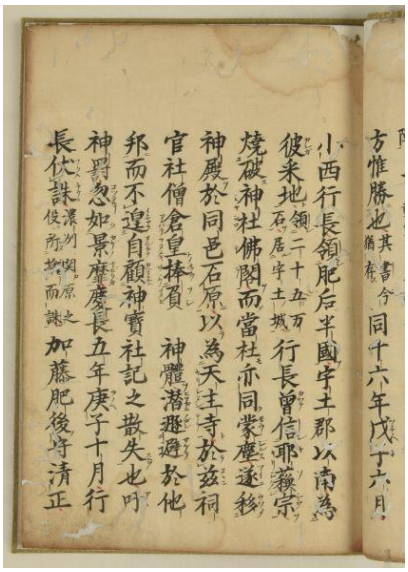
しかし、「妙見」はそれでも残り続けた。原動力となったのは、ほかならぬ八代の人々の「妙見」に対する真摯な尊崇の思いである。

その一つの証左となるのが、医王寺蔵・木造妙見菩薩立像の台座裏の墨書銘だ。これによれば、本像は江戸時代、妙見宮神宮寺の護摩堂で祀られていた尊像であったが、「当時一新」（明治３年の神仏分離令）により、神宮寺そのものが廃されてしまった。しかし、最後の住職・白木氏が本像を大切に保護し、明治 17 年（1884）信仰の篤い町人が譲り受けて「子々孫々長久商売繁盛百年開運」を願い祀ったという。一面いっぱいにビッシリと書かれた墨書からは「妙見をいつまでも残し、伝えねば！」という意思を感じる。江戸時代を通じて発展・確立した八代の妙見信仰が、近代以降も八代の人々の間で確かに継承されていたことを示す顕著な事例である。

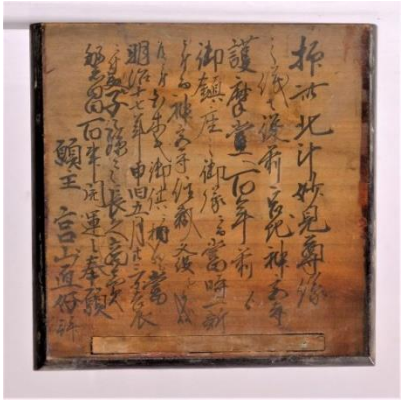
残されたのはこれだけではない。本展覧会に出品されている作品のほとんどは、同じく時代の荒波を乗り越えて、人々の手によって現在まで残されたものばかりだ。それが今一堂に会しているという、レアな現場を我々は目撃しているのだ。

その展覧会もあと数日で終幕（11 月 28 日まで）。お見逃しなく！

【主幹（学芸員）　鳥津亮二】



『妙見宮実紀』（部分）
享保 15 年（1730）　個人蔵
出品番号 1



木造妙見菩薩立像と台座裏墨書銘
江戸時代（18 世紀）八代市・医王寺蔵
出品番号 30